S3

伝達モード効果としての図示性の再検討

ジェームズ・タイ
（国立中正大学［台湾］）

要旨

音声言語と手話言語に共通する言語的普遍性を探る際には、伝達モード効果とそれを受けないものを区別することが有用な方針である（Meier et al. 2002, Sandler and Lillo-Martin 2006）。図示性は、人間のコミュニケーションの二つの経路からくる相異なる構造原理を動機づける重要な伝達モード効果であると考えられている。

まず一方で、Klima and Bellugi (1979) 以来、手話言語において図示性が果たす重要な役割が認知されてきた。このことは Sandler and Lillo-Martin (2006) の研究からもわかる。彼らは、言語のあらゆるレベルで生成文法の枠組みを用いて手話言語の重要構造を構成しているが、手話言語に普遍的な存在として伝達モード効果を認定しないことはできない。伝達モード効果の例として、空間を代名詞や動詞の一致に利用すること、産出と知覚の同時性、図示的有契性があげられる。しかし、これら三つの伝達モード効果は、図示性効果として一つにまとめることができる。

他方、音声言語においても図示的有契性は広くみられる（Haiman 1980, 1985）。同様に、音象徴（Hinton 1994）や日本語の擬態語（Hamano 1986, Kita 1997）は豊富である。

もし発話同時ジェスチャー（McNeill 1992, McNeill ed. 200, Kendon 2004）やイントネーション（Bolinger 1989）、表情による感情発出（Ekman 1997）における図示的有契性の豊富さを考えに含めるならば、音声言語はこれまで捉えられてきたよりも遥かに高い図示性を有することを、本発表では主張する。伝達モード効果としての図示性を示す証拠は多分にある。端的に言えば、図示的有契性は、聴覚モードを用いる音声言語と視覚モードを用いる手話言語で、異なる形で顕現し分布しているのである。

最後に、自然言語に図示性が広く見られることから、記号の恣意性や統語論の自律性といった重要な言語学上の教条の再考が求められることを指摘する。脳と心の理解についても、自然言語の図示性は自明ならざる含意を持つ。

キーワード：Iconicity, Sign language, Modality effect, Gesture, Facial expression